

# 多文化共生社会における周縁化されたマイノリティの在り方

—マジョリティとの接触場面における会話分析を通じた考察—

魏 小花\*

本研究は、マイノリティが多文化社会において、マジョリティとどう関わっているかを明らかにするため、いくつかの接触場面を通じて会話分析をした。具体的には、引きこもり現象を起点とし、国家という成員カテゴリー化装置の下で自己保存を図るマイノリティが、次第にその枠組みを超えてマジョリティと関わりを持つ過程に焦点を当てている。この過程では、当初マイノリティが一方的に日本人マジョリティに従う姿勢を示すところから始まり、徐々に提案や交渉を通じて自己表現を果たし、最終的には異議申し立てに成功するまでの段階を描いた。しかしながら、マイノリティの利益が満たされた場合、新たにマジョリティが不利益を被り、逆にマイノリティの立場に置かれるという終わりのない循環が生じる可能性がある。真の多文化共生の実現には、単にマイノリティーの自己実現や抗議の成功に留まることなく、多文化共生の前提である「多様性」という視点からさらなる探求が必要であると結論付ける。

**キーワード：**多文化共生社会、マイノリティ、接触場面、会話分析、多様性

## 1. はじめに

「共生」という概念は、1879年にドイツの微生物学者アントン・デ・バリによって提唱され、主に生物学の分野で異種生物が共存する状態を示す用語として長く使用されてきた。生物学における狭義の共生は、相互利益をもたらす関係性を強調する一方で、これを超えて本研究では、より広範な「共生」概念に焦点を当てる。広義における共生は、単なる互惠的な利益関係に留まらず、対立や搾取、従属を含む動的で複雑な利害関係の存在を指す。このような共生の関係は、相利共生や寄生の関係が環境に応じて変化する生物学的モデルを参考にしつつ、社会的文脈にも適用可能性もある(中山, 2012)。この広義の共生概念を基に、本研究では現代日本の多文化共生社会におけるマイノリティとマジョリティの関係性を検討する。

日本の多文化共生社会において、「共生」という言葉はしばしば「善」や「調和」といったポジティブなイメージと結び付けられるが、一方でその背後には不平等な力関係が隠されている場合がある

---

\*教育学研究科 博士課程後期3年の課程

と指摘されている(植田, 2006; 杉原, 2010)。尾関(2016)は、現代において共生の概念が政策用語として使用され、社会の多数派によって便利な言葉として利用される傾向があることを指摘している。彼は、共生が抑圧の手段となりうる可能性を警告しており、表面的には調和的に見える「共生」が、実際には周縁化されたマイノリティにとって不平等な関係を内包していることがあることを強調している。

## 2. 研究目的

本研究では、これらの批判的視点を踏まえ、現代日本における多文化社会において、周縁化されたマイノリティの視点や立場を中心に据え、彼(女)らがどのように多文化社会の中で存在しているかを明確にすることである。さらに、その視点から、多文化共生社会の実現可能性や課題を検討し、より包括的な共生のあり方を考察することを目指す。

## 3. 方法論：会話分析

会話とは、「対面社会(the face to face society)」, 即ち、蓄積された共通体験に基づく濃密な共通理解に依存した小共同体に特有のカテゴリーの一つである(井上, 2021)。他者との会話が、愛・謙譲・人間に対する信頼・希望・批判的思考という徳を身に付けた個と個の出会いによってなされる。また、このような会話が「双方向的な伝え合い」として現象する能動的行為である(倉八, 2001)。人が多文化と対話ができるようになり、共生段階に達するためには、自己を失った状態で「外発的」にひらかれるのではなく、自己を持った状態で「内発的」にひらかれることが必要である。「内発的」にひらかれるためには、個が、己の知の貧困を自覚し、行動と省察の表現である「ことば」を身に付け、他者と「対話」を行うことが必要になる(倉八, 2001)。

会話と共生の両概念は、切っても切れない関係にあるものであると考えられる。本研究では、以下に会話と共生の関係性について詳述する。

### 3.1 会話が異質者の結合を可能にする

会話とは、異質な諸個人が異質性を保持しながら結合する基本的な形式である。利害・関心・趣味・愛着・感性・信念・信仰・人生観・世界観を共有することなく、他者と会話できる。相手の存在理由を根本的に否定するほど鋭い対立関係にあっても、会話は可能であり、議論がすれ違っても、会話そのものによって対立する主体の共生が実現されている。会話が異質者の結合を可能にするのは、それが共通の目的のための共通の行動計画の共同遂行ではないからである。会話は会話者に何かを分からせたり、承諾させたり、感動を共有させたり、特定の役割を演じさせたりすることを本質的な目的としていない。コミュニケーションや言語ゲームは、一つの目的に人間行動を収斂させる「暴力性」が免れ得ないが、会話にはそれがない。会話は「分からず屋」を排除しない(井上, 2021)。

期待を裏切る言動は言語ゲームの敵ではあっても、会話の敵ではない。それが契機となり意外な

方向へ発展するところに、人間の生の営みとしての会話の深みがある。定められた手続きに従うだけの会話は死せる会話である。要するに、会話とは行動を共にする人間の結合ではなく、行動を異にしながらいっしょに共生の営みを営み続ける人間の結合である(井上, 2021)。

### 3.2 対話によって共同の姿が創造される

他者に向かって反復される行為と共に、個人のうちに間柄性や共同性といった性質、つまり社会性が育まれてくる。その中から、現象学的に見て個人間の関係が次第に内面化されていく三つの性質が取り出される。①まず、個人が独立しながら関係しあう「相互性」が成立する。②次に、それが親密さを持ち、情緒的な結合の度合いを増すことで「間柄性」が生まれる。③さらに、この間柄に立って個人の「共同性」が自覚される(金子, 2023)。

このような観点から、社会は個人の「間」にある対話的な相互作用の関係形式として捉えることもできる。というのも相互行為の反復は親しい間柄をおのずと形成していくからである。最初は互いに見知らぬ関係にあった者が出会い、この出会いが反復される時一つの新しい形が双方の間に一つの著しい関係として生まれてくる。この間柄は他者との結びつきを強める共同性によって基礎づけられている。人間はこの間柄の世界に真に生きる意味を見だし、個人としての価値もこの間柄の中でのみ実現することができる(金子, 2023)。

### 3.3 共生の作法—会話としての正義

井上は、法哲学を専門とする思想家である。彼の名著『共生の作法』(1986)で主張されているのが「会話としての正義」である。井上(1986)の議論は次のようになる:「望ましい社会を形成するには「正義」の復権が不可欠である。その正義の内実をなすのが「会話」である。ここでいう会話とは、何らかの意図や背後の人間関係を含意する「コミュニケーション」とは異なる。相互に尊重し合う、対等な関係にある二者が行うのが「会話」である。会話は「開放的」であり、「目的独立的」である。私たちはふと出会った他者との会話を楽しむことができる。このような会話を、より良い社会を築く基礎とできないか」。

会話としての正義は、コミュニケーション的共同性への思考に内在する「話せば分かる」という楽観主義や、その裏返しとしての「分かる者とだけ話そう」という排除の論理、「分かればもう話す必要はない」という効率主義にはコミットしない。それは「話し合ったのだから文句を言うな」という手続き的正義とも異なる。会話としての正義の発想を標語的に表現するならば、「話し続けよう」である。会話を正義の問題の決定手続きとするのではなく、会話という営みをパラダイムとする人間的共生の形式そのものを擁護し、その持続を可能にする条件として正義を構想するものである(井上, 1986)。

### 3.4 共生と言語生態学

共生言語の「共生」という概念には、言語生態学(Language Ecology)という理論的背景がある。

言語生態学(岡崎, 2009)とは, 1972年以来発展してきた学問領域であり, 社会(学校・家庭・職場)で行われる言語活動において, その言語がどのように機能しているのかを様々な環境と有機的に結びつき合っている生態としてとらえるアプローチである。

岡崎(2003)によると, 「共生」とは, 異なる種に属する生物同士が物理的な関係や接触を保ちつつ共に生活することであり, それによって新たな共生体や形質(新しい器官や行動・特性)が生まれ, 困難な環境条件の下での両者の存続が可能となり, この新たな共生体は環境を変えていくという。このような理論的立場から捉えた場合, 非母語話者と母語話者がやりとりする接触場面は, 社会的な環境変動によって従来のやり方では困難が生じる中で, 参画メンバーが交渉の上, 新たな関係を形成し互いのリソースを活用する道を開くことで, 全体も個も存続を可能とする新たな能力を作り出す共生化の場とされている(杉原, 2010)。つまり, 非母語話者と母語話者の接触が日常化する新たな言語・文化状況の中で, 自己の持つリソースに依拠しながら相手側の言語・文化とのネゴシエーションを通じて, 参入側・受け入れ側双方に言語的共生化・文化的共生化の過程が形成される。この過程の下では, 各自の能力を十分生かせない状況で, 新たに統合的な能力を形成することで両者の存続の展望が開かれる(岡崎, 2003)。

### 3.5 具体的な研究方法

前述した会話と共生の関係性を参考にすれば, 会話場面自体が共生の場面として考えられる。このため, 会話を通じて多文化間共生関係を検討することは有効な方法論の一つである。本研究の目的は, 現代日本の多文化社会において周縁化されたマイノリティの視点や立場を重視し, 彼らの多文化社会での在り方を明らかにすることである。この目的を達成するために, 以下の方法論を採用する。

まず, 日本語母語話者であるマジョリティーと日本語非母語話者であるマイノリティの接触場面に注目する。次に, この接触場面で発生する会話内容を微視的に分析するアプローチを基盤とする。この分析の中心に置くのは, 日本語非母語話者であるマイノリティがどのように日本語母語話者であるマジョリティーとコミュニケーションを図り, 共生関係を構築しているかという点である。この分析により, 多文化共生社会におけるマイノリティ側の在り方を, マジョリティー側との会話的な相互作用の実態から具体的に明らかにすることができると思う。

## 4. 多文化共生社会における周縁化されたマイノリティの在り方

### 4.1 接触場面におけるマイノリティー側の引きこもり現象

#### 4.1.1 会話データの詳細と分析

ここで, 2組それぞれ3人(日本語母語話者女性1名, 日本語非母語話者男性1名, 日本語非母語話者女性1名)で構成された合意形成型ディスカッションの会話データを収集した。各組の3名は, 同じ大学院の授業に出席している既知の同級生である。ディスカッションのテーマは「無人島に3つ

の物だけ持っていけるなら, 何を持っていくか?」とし, 重要度によって順位付けを行うものとした。会話の開始前に, 参加者それぞれに持っていききたい3つの物を考えておくように指示した。会話データの詳細は表1に示す。日本語録音内容の文字起こしには, 『基本的な文字化の原則 (Basic Transcription System for Japanese: BTSJ) 2019年改訂版』(宇佐美2019)を参考した。

表1: 会話データの詳細

会話データ①			
会話収録時間	2020年10月2日		
会話時間	00:06:28		
話者の数	3		
話者記号の凡例	JF01 (日本語母語話者女性1名): Japanese Female01 CM01 (日本語非母語話者男性1名): Chinese Men01 CF01 (日本語非母語話者女性1名): Chinese Female01		
発話数(回)	JF01	CM01	CF01
	47回	37回	17回
会話データ②			
会話収録時間	2020年10月21日		
会話時間	00:14:40		
話者の数	3		
話者記号の凡例	JF02 (女性の日本人学生): Japanese Female02 CM01 (男性の中国人留学生): Chinese Men02 CF01 (女性の中国人留学生): Chinese Female02		
発話数(回)	JF02	CM02	CF02
	50回	49回	13回

表1から明らかのように, CF01とCF02の発話数は他の2人よりもかなり少ない。このことから, 引きこもり現象がうかがえる。以下では, CF01とCF02の発話内容に焦点を当て, 彼女たちの会話例(表2-1～表2-10)を挙げながら, 引きこもりに関連する現象を読み解く。

①控えな発言で自分の提案を述べる

表2-1: 会話例 (CF01が自分の提案を述べる際に)

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発話内容
32	25	*	CF01	はい, 私はライター, あの, 火が必要で, 次は水, なんか飲める水, 最後はナイフですね, あの, 安全のためとか, あとは食品を作ったりとか, という感じです, 以上です。

表2-2: 会話例 (CF02が自分の提案を述べる際に)

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発話内容
10	9	*	JF02	あー, なるほど, [CF02の姓]さんは, どう, ですか?。

11	10	*	CF02	私の考えは、火は必要だから、多分、ライトは、一番持ちたいものです。
12	11	*	JF02	あ、ライト、ライ、ライター？。
13	12	*	CM02	ライター、ライターです。
14	13	*	JF02	ライター？うんうんうん、私も書いたそれ〈笑〉。
15	14-1	/	CF02	2番は食べ物なた、たね？..
16	15	*	JF02	うん。
17	14-2	/	CF02	かなと..
18	16	*	CM02	ほー。
19	17	*	JF02	うんうんうん。
20	14-3	*	CF02	3番はこかたな？こかたな。

CF01の発話は短いフレーズや断片的な文、および補完的な言葉で構成されている。例えば、「ライター、あの、火が必要で、次は水、なんか飲める水」といった断片的な表現が多い、「あの」「なんか」「ですね」といった補完的な言葉を多用している。これらの特徴から、CF01はコミュニケーションにおいて完全な自信を持っていない可能性があると考えられる。また、CF01の発話は主に事実を述べることに焦点が当てられており、感情的な表現や主観的な意見が少ない。例えば、「火が必要で」「飲める水」「安全のため」といった基本的な必要性を示すのみである。感情や主観の表現が少ないことから、CF01は自己表現に対して控えめである可能性が高いと考えられる。

CF02の発話には「多分」「かな」といった曖昧な表現が多用され、「た、たね？」や「こかたな？こかたな」のように言い直しや修正が見られる。これらの特徴は、自分の発言に対する自信の欠如や自己評価の低さを反映しており、不確かさや不安を示唆している可能性がある。また、CF02の発言は短く、要点のみを伝える傾向があり、自分の意見を長く話すことに抵抗があることが示唆される。この発話の特徴から、CF02は他者との対話に対して回避する傾向がある。引きこもりの背景には、自己否定感や他者の評価に対する過敏さがあり、これがCF02の発話にも表れている。また、発話量が少なく具体的な内容に欠けることから、CF02は社会的交流が不足している可能性が高い。引きこもりの人は一般的に他者との関わりを避ける傾向があり、CF02の発話にもこの傾向が見受けられる。

## ②他者の意見への依存

表2-3：会話例（CF01が他者の意見に対して同意と補足を多用する）

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発話内容
55	41-1	/	JF01	... 今日の前に、必要なものは食品とか、水だし..
56	42	*	CF01	そうですね。
62	46-1	/	CM01	あー、でも水がないと、きれないじゃないですか..

63	47	*	CF01	そうですね。
67	47-1	/	JF01	なんか水をろ過する？、ものを、あのう、木で、葉っぱとか、ロートみたいなのを作って、っていうのを見たことある..
68	48	*	CF01	そうです、はい。

表2-4：会話例 (CF02が他者の意見へ依存する)

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発話内容
66	61	*	CM02	それは、[CF02の姓]さん、全然喋らないですね。
67	62	*	JF02	[CF02の姓]さん、会話に、全然思ったことを言っちゃって。
68	63	*	CM02	[CF02の姓]さんが接続切れてる？。
69	64	*	CF02	<笑い>いや、そう、[CM02の姓]さんと [JF02の姓]さんの意見を聞いています、大体、[JF02の姓]さんの意見と似ています。

CF01の発言は主に他者の発言に対する相槌や簡単な同意で構成されており、自発的な意見や発言はほとんど見られない。これにより、彼女が他者の意見や状況に依存し、相手の話を聞くことに重点を置いていることが示唆される。このようなコミュニケーションスタイルは、引きこもり現象において一般的に観察される特徴であり、自発的な行動や意見表明が少ない傾向を反映している。引きこもり現象では、自己主張や積極的な発言が控えめで、他者の意見に従う姿勢が強く見られることが多いため、CF01の発言パターンもこの傾向に一致していると考えられる。

CF02は発言が少なく、他者の意見をよく聞いている傾向がある。特に、CM02やJF02が発言した後、「大体、[JF02の姓]さんの意見と似ています」と応じており、自己の意見を積極的に述べることは少なく、他者の意見に同調する傾向が見られる。これは、CF02が自分の意見を表明するよりも他者の意見に従うことで安心感を得ていることを示唆している。この行動は、自分の意見が他者と異なることによる対立や不安を回避しようとする心理状態を反映している可能性がある。

### ③深い議論から距離を保つ

表2-5：会話例 (CF01の漠然とした言い返し)

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発話内容
90	74-1	/	CF01	ライ、あ、ライターよりは、なんか、火を、その、作る、その、石？..
91	75	*	JF01	うんうん。
92	74-2	/	CF01	そのようなもののほうが..
93	76	*	JF01	あー。
94	74-3	*	CF01	長時間かなと。

表2-6: 会話例 (CF02が他者との切磋琢磨を避ける)

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発話内容
96	91	*	JF02	うんうん、なんか、こう、湧かしてろ過できるような、溜めておけるし、ろ過できるみたいな、確かに。絶対に水困りますもんね、確かに、やかん、あり、ありだと思います。
97	92	*	CF02	三番目は何にしますか？。

CF01の発話には、曖昧な表現が多く見られる。例えば、「なんか」、「その」、「そのようなもののほうが」などの表現が使われており、これによって話題が明確にされず、議論が深まることを避けているように見える。この傾向は、深い議論に対する抵抗感や不安感から来ている可能性がある。また、CF01は「あ」、「あー」などの間投詞を頻繁に使用しており、これが話の流れをゆっくりとさせる要因となり、議論が具体的な方向に進むのを妨げていると考えられる。さらに、CF01は「長時間かなと。」といった発言を通じて、断定を避け、相手の反応を確認する形で話を締めくくっている。このアプローチにより、自分の意見を強く主張することを控え、議論が深まるのを防いでいると考えられる。全体として、CF01の発話には曖昧な言葉の使用と間投詞の頻繁な使用が見られ、これが議論を表面的なままに保つ要因となっている。これにより、彼女が自分の意見や感情を強く表出することを避け、引きこもりの姿勢を示していることがうかがえる。

JF02が議論を深めている最中に、CF02は「三番目は何にしますか？」と突然質問を投げかけている。この発言は、相手の意見を十分に聞かずに次のステップに進もうとしていることを示しており、早く結論を出して議論を終わらせたいという意図が見られる。これは、深い議論に対する抵抗感や不安感の表れと考えられる。このような姿勢は、議論に表面的に関与することで、他者と切磋琢磨することを避けるための回避的な行動であり、引きこもりの現象として解釈できる。

#### ④他者の発言に対する反応の淡漠

表2-7: 会話例 (CF01は他者の発言に対する反応の少なさ)

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発話内容
95	77-1	/	JF01	うんうんうん、そしたらその鳥にあるかもしれないですね..
96	78	*	CF01	あー、はい。

表2-8: 会話例 (CF02の現実的かつ慎重な発言)

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発話内容
76	71	*	JF02	結構、先が長い話になりそうですね、もう、本当にそれ。
77	72	*	CM02	なん、何年間の、なんか。
78	73	*	CF02	わからない。

CF01の発話は、「あー、はい。」と一言挟むだけで非常に短い表現で終わっている。このことから、対話の深掘りや具体的な情報提供が不足していることが明らかである。また、CF01の発言には感



情的な表現や具体的な意見が欠如しており、単なる相槌にとどまっている。このような発話パターンは、CF01が対話に対して消極的であることを示唆している。加えて、CF01はJF01の発言に対して深い興味や関心を示さず、表面的な同意のみで応じている。これにより、CF01が他者の発言に積極的に関わることを避けていることが明らかである。全体的に、CF01の発話は非常に短く、その内容も薄いため、彼女が意図的にコミュニケーションの量や質を縮小している可能性がある。これは、引きこもり現象における対人関係の縮小と一致するものと考えられる。

CF02の発言「わからない。」は、彼女の慎重で現実的なアプローチを反映している。この発言は、具体的な見通しや計画を示さず、自分の不確実性を明示している。これにより、彼女は状況が不明瞭な場合には意見や行動を明確にすることを避ける傾向が見られる。このような発言は、困難な状況や問題に直面することを回避し、答えや行動を取ることに消極的である引きこもりの傾向と関連している可能性がある。また、CF02は他者と共同で問題を検討する意欲を示さず、「わからない。」という回答で自分の意見や行動を明確にすることを避けている。この姿勢は、他者との共同検討や社会的な関与を回避する傾向を示唆している。このような社会的な交流や問題解決プロセスへの参加意欲の欠如は、引きこもりの一因として考えられることがある。

#### 4.1.2 接触場面におけるマイノリティー側の引きこもり現象の読み解き

以上の分析を通じて、CF01とCF02の発話特徴から、彼女たちの接触場面における引きこもり現象を検討した。なぜこの2組の女性留学生が同じ引きこもり現象に関連する発話特徴を示したのかについて考察すると、まず、他者との人間関係の熟知度や日本語能力が関係している可能性が考えられる。しかし、実際には、この2組の参加者は既知の同級生であり、普段も深い人間関係を築いているわけではないため、互いの人間関係の深さには大きな差がないと考えられる。また、全員が日本語能力試験のN1レベルに達している上級者であることから、言語能力が引きこもり現象に与える影響は少ないと推測される。したがって、彼女たちの引きこもり現象の原因は、単に会話に参加したくないという心理的な要因に帰することができるのではないかと考える。

このようなマイノリティーの引きこもり現象は、会話場面だけでなく、多文化社会のさまざまな場面でもよく見られる。例えば、学校や大学では、留学生が新しい文化や言語の壁に直面し、孤立感から授業やクラブ活動に参加しなくなることがある。また、多文化環境の職場では、異なる文化背景を持つ従業員が言語や文化の違いから職場で孤立し、交流を避けることがある。さらに、新しい地域に引っ越してきた移民や難民が、地元コミュニティとの交流に苦勞し、地域社会から孤立することもある。この現象について、現在の哲学において流行している「他者論」(水谷, 2022)では、「他者とのコミュニケーションとは、他者の呼びかけに対する応答であり、その意味における責任の引き受けに他ならない」とされている。さらに、「他者の『顔』の前で、主体が不可避的に絶対的受動性としての無限の責任に直面する」とも言われている。このように考えると、周縁化されたマイノリティーが中心に参加したくないという行為自体に「罪」があり、「引きこもり」たちが会話を「楽しくな

い」と感じるのは彼(女)らの側の問題であると見なされてしまう可能性がある。

一方で、この見解に対して、水谷(2022)は、「心優しき『ひきこもり』たちとは、こうした厳しい『責任』の引き受けというコミットメントを(積極的な拒否ではなく)ただ躊躇する存在なのだ。これを『道徳的悪』であると断罪することは、果たして可能であろうか」と疑問を呈している。その理由として、水谷(2022)は、「一見すると『広場恐怖症』という名前を与えられた少数の『病理学的問題』であるかに見えるこの問題の中に、ひょっとすると『会話の場としての公共圏』を再考するヒントが隠されているかもしれない」と述べ、引きこもり現象は単に個人の問題ではなく、社会全体で考えるべき課題であることが明らかになる。更に、「会話は、通常考えられている以上に困難な作業なのであり、その困難さのゆえに楽しさもあるともいえる。しかし、この困難さに耐えられず、それゆえその楽しさをも放棄する人々が数多くいることもまた事実なのである」と指摘し、引きこもり現象を「会話自体」という原点に戻って再考することの重要性を強調している。

## 4.2 成員カテゴリー化装置におけるマイノリティの自己保存の現象

### 4.2.1 自己保存について

地球上の生命が誕生したとされる40億年前から、生命は飢餓、有毒な酸素、有害レベルの紫外線に囲まれた過酷な環境条件の下で、共生することによってそれぞれの生物のリソースを活用し、全生命体の存続を可能にしてきた。さらに、生命体と地球環境との共生関係も築かれてきた。地球上の生命史を通じて見られる共生の現象において、2種類の原始生命体が共生してきた原則が「自己保存(self maintenance)」である。元々別の生物であったものが新たな秩序の下で共生を始める際、それぞれが自己と非自己を区別し、独自の細胞分裂によって増殖し、自己複製することは、生命の根源的な本性であるとされる(岡崎2003)。

この「自己保存」の過程は、自己と他者を区別することを出発点とするアイデンティティ(自己同一性)概念に関わると考えられる(杉原2010)。アイデンティティについて、バーバ(2005)は「自己認識の欲求—すなわちある他者にとって存在すること—は、主体の表象を他者性との差異化のレベルで行う行為を必然的に伴う」と述べている。つまり、相対的に他者を規定しなければ自己を規定できない。この自己保存の行動特性が「根源的な本性」を表現していることから、避けられない必然的で不可欠な過程と理解することができる。「自己保存」の行動特性は「過程」として捉えられており、「保存」とは固定化するのではなく、流動的な動きの中で「自己を保つ」という意味合いである。換言すれば、自己と他者が互いに影響し合う変化の中で、双方が自己を保とうとするのである(杉原2010)。

では、この「自己保存」の行動特性は、非母語話者と母語話者の接触場面にどのように現れるだろうか。接触場面における行動として考える場合、会話分析の領域で、会話の中に現れるアイデンティティを捉える概念である「成員カテゴリー化(membership categorization)」(Sacks 1972)の概念が参考になると考えられる。成員カテゴリーとは、ある集団の相互行為に現れる成員のアイデンティ

ティ・カテゴリーであり、会話の参加者が自己と他者を何者として位置付けているかという社会的関係性を表すものである。会話の中で、参加者は成員カテゴリー化の自己呈示を行い、互いに受諾し確認し合いながら、同時にそれぞれが他方をカテゴリー化して、互いが何者なのかをその場で構築すると捉えられる。すなわち、やりとりを進める中で、まずある参加者がその場で重要視されている何らかの属性に注目して互いを区別するような発話を行い、続いて他の参加者も自分をその属性に重ね合わせるような発話が続く、というやりとりが想像される。その一連のやりとりの結果として「自己保存」と呼べる行動特性が確認される可能性がある(杉原2010)。「自己保存」の過程は、接触場面の共生化に向かう一つの契機であり、必然的で不可欠に現れるものである。また、「日本人/外国人」という形での「自己保存」は、避けられない事態と捉えられる。

#### 4.2.2 会話データの詳細と分析

本研究では、接触場面における「日本人/外国人」カテゴリー対という形での「自己保存」の状況について考察する。考察方法として、以下の手順を採用する。①データ収集：BTSJ 日本語1000人の自然会話コーパスを用い、その中から接触場面を抽出する。また、接触場面に出てくる母語話者の母語場面も対照群として取り出す。②データの選定基準：考察対象とする会話の統一性を確保するため、会話の相手が同性(女同士)のペア、上下関係がない同等の立場、初対面での雑談各グループ内の会話時間がほぼ同等などの条件に基づいてデータを選定する。この条件の範囲を設定した理由は、1000人会話コーパスの中でこの条件を満たす会話が相対的に多いためであり、サンプル数を確保するためである。③出身地言及回数の計量：「日本人/外国人」カテゴリー対という形での「自己保存」の過程を分析するため、会話の中でどの程度出身地が言及されているかを計量する。具体的には、発言における出身地に関する言葉を数える。その結果を以下の表3にまとめる。会話参加者の数字凡例には、括弧内に参加者の出身地を表示する。出身地が不明な場合は「言及なし」とする。出身地の判定は、会話相手との相対的な位置付けに基づいて行う。具体的には、相手が同じ日本人の場合は日本国内の出身地として判断し、外国人の場合はその出身地を国を越える出身地として判断する。

表3：出身地言及回数の計量結果

JF136をベースとする会話組		会話時間	出身地の言及回数	
JF136(広島)	JF135(横浜)	00:15:39	広島:1	横浜:0
JF136(広島)	JF137(横浜)	00:15:07	広島:7	横浜:8
JF136(日本)	TFA011(台湾)	00:15:24	日本:22	台湾:9
JF136(日本)	TFA012(台湾)	00:15:10	日本:33	台湾:23
JF137をベースとする会話組		会話時間	出身地の言及回数	
JF137(横浜)	JF135(横浜)	00:15:00	横浜:5	
JF137(横浜)	JF136(広島)	00:15:07	広島:7	横浜:8

JF137(横浜)	JF138(茨城)	00:14:52	横浜:6	茨城:2
JF137(日本)	TFA004(台湾)	00:14:54	日本:3	台湾:5
JF137(日本)	TFA012(台湾)	00:15:46	日本:8	台湾:0
<b>JF138をベースとする会話組</b>		<b>会話時間</b>	<b>出身地の言及回数</b>	
JF138(茨城)	JF137(横浜)	00:14:52	茨城:2	横浜:6
JF138(日本)	CFA005(中国)	00:14:40	日本:30	中国:15
<b>JFB014をベースとする会話組</b>		<b>会話時間</b>	<b>出身地の言及回数</b>	
JFB014(栃木)	JF089(千葉)	00:15:52	栃木:4	千葉:2
JFB014(日本)	TFI001(台湾)	00:18:20	日本:13	台湾:4
JFB014(日本)	TFSu001(台湾)	00:14:17	日本:7	台湾:6
<b>JFB015をベースとする会話組</b>		<b>会話時間</b>	<b>出身地の言及回数</b>	
JFB015(不明)	JF089(不明)	00:15:45	(出身言及なし)	
JFB015(日本)	TFI001(台湾)	00:17:23	日本:14	台湾:11
JFB015(日本)	TFSu001(台湾)	00:17:44	日本:23	台湾:10
<b>JFB016をベースとする会話組</b>		<b>会話時間</b>	<b>出身地の言及回数</b>	
JFB016(不明)	JF089(不明)	00:17:51	(出身言及なし)	
JFB016(日本)	TFI001(台湾)	00:21:48	日本:17	台湾:6
JFB016(日本)	TFSu001(台湾)	00:20:48	日本:20	台湾:14
<b>JFB017をベースとする会話組</b>		<b>会話時間</b>	<b>出身地の言及回数</b>	
JFB017(不明)	JF090(不明)	00:10:00	(出身言及なし)	
JFB017(日本)	CFA001(中国)	00:10:00	日本:15	中国:11
JFB017(日本)	VFN001(ベトナム)	00:10:00	日本:7	ベトナム:5
<b>JFB018をベースとする会話組</b>		<b>会話時間</b>	<b>出身地の言及回数</b>	
JFB018(不明)	JF090(不明)	00:10:00	(出身言及なし)	
JFB018(日本)	CFA001(中国)	00:10:00	日本:9	中国:13
JFB018(日本)	VFN001(ベトナム)	00:10:00	日本:15	ベトナム:14
<b>JFB019をベースとする会話組</b>		<b>会話時間</b>	<b>出身地の言及回数</b>	
JFB019(不明)	JF090(不明)	00:09:59	(出身言及なし)	
JFB019(日本)	CFA002(中国)	00:09:57	日本:10	中国:22
JFB019(日本)	VFN001(ベトナム)	00:10:01	日本:16	ベトナム:16
<b>JFB020をベースとする会話組</b>		<b>会話時間</b>	<b>出身地の言及回数</b>	
JFB020(広島)	JF091(東京)	00:10:10	広島:1	東京:1
JFB020(日本)	CFA002(中国)	00:10:07	日本:11	中国:1
JFB020(日本)	KFN001(韓国)	00:09:57	日本:7	韓国:7

まず、全体的な分析として、今回の考察ではBTSJから抽出した11組の会話データを統計的に分析する。このデータは、BTSJ中で本考察の条件に合致する全てのデータ量である。表3からわかるように、同性(女同士)、同等の社会地位、初対面、ほぼ同じ時間内での雑談という同じの条件下において、日本人同士の会話では双方の出身地の言及回数が比較的少ないのに対し、外国人との会

話では双方の出身地の言及回数が増加する傾向がある。例えば、JF135を基にした会話グループでは、JF135が同じ日本人のJF136やJF137と雑談する際には出身地の言及回数が少ないのに対し、外国人女性(TFA011(台湾), TFA012(台湾), CFA003(中国))との会話では出身地の言及回数が増加している。この傾向から、外国人との会話では国内での会話とは異なる成員カテゴリー化の現象が見られることが推測される。また、日本語能力が初級(A), 中級(I), 上級(A), 超級(Su)の学習者においても、若干の例外を除き、同様の傾向が見られる。この現象は、外国人と初対面の際に会話双方が自らを保護するための行動であると考えられ、多文化共生社会におけるマイノリティ側の自我保護の一形態であると言えるだろう。

次に、具体的な会話事例を分析する。会話中に習慣的に各自の国に言及する以外に、主に3種類の現象が見られた。1つ目は、外国人が自らを自国のカテゴリーに当てはめること、2つ目は、外国人が相手の日本人に自分の国のカテゴリーまで引っ張られること、3つ目は、双方が無意識に国のカテゴリーを持ち込むことである。以下に、具体的な会話例(表4-1～表4-5)を示す。

**成員カテゴリー化現象①：外国人が自らを自国のカテゴリーに当てはめること**

表4-1：KFN001(韓国人日本語初級学習者)の成員カテゴリーの自己適用

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発話内容
135	127	*	KFN001	とー, 自分の論文はわたしだからかん, <b>わたしは韓国人です</b> からー, 北朝鮮の問題<に, 興味があります>< 。
136	128	*	JFB020	<あー>> , うん<うんうん>< 。
(中略)				
64	61-1	/	KFN001	<b>韓国ー, 韓国では,</b> んー, 日本語, え日本に, えー, 来たー, あ, 来た前にー(うーん), んー, 4か月ぐらい, 。
65	62	*	JFB020	4か月? =。
66	61-2	*	KFN001	=はい, 勉強しました。
67	63	*	KFN001	んー, <b>やっぱり韓国人だからー,</b> えと(うーん), 構図が同じですからー(うんうんうん), ちょっとー, ほかの, えとー, 外国人に比べてちょっと利点がありますね =。

(出所：BTSJ1000人日本語自然会話コーパス [171-12-JFB020-KFN001.xlsx])

まず、KFN001が言った「わたしは韓国人ですからー、北朝鮮の問題に、興味があります」という発話には、自分の国籍を明示することで、自身の興味や専門性を正当化している。これにより、自分の発言の信頼性や権威を高め、自己保存を図っていることが考えられる。また、「韓国ー、韓国では、...、日本語、え日本に、...、来た前にー、...、4か月ぐらい、。」の発話には、韓国での経験を共有することで、自分が韓国という文化的背景を持っていることを強調し、その背景が自分のアイデンティティの一部であることを示しているとみられる。更に、「やっぱり韓国人だからー、...、構図が同じですからー、...、ほかの、...、外国人に比べてちょっと利点がありますね」と、韓国人であることが日本語学習において有利であると述べることで、自分の立場を強化している。これにより、自分が他

の外国人と異なる特定の利点を持っていることを示し、自己保存を図っていることが示唆されている。

以上の会話分析から、KFN001が自らを自国のカテゴリーに当てはめることで、自国(韓国)を成員カテゴリー化装置として使用し、自己保存を行っている様子が伺える。このカテゴリー化により、自分の興味や経験、利点を正当化し、自身のアイデンティティを強化している。対話者JFB020の反応もこれを支持しており、KFN001の自己保存が対話の中でうまく機能していることが明らかになる。このような成員カテゴリー化装置の使用は、個人が社会的文脈で自分の立場を確立するための重要な手段となる。

## 成員カテゴリー化現象②：日本人に自国のカテゴリーに引っ張られること

表4-2：JF135(日本語母語話者)からの応答要請

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発話内容
168	158	*	JF135	え、なんか <b>日本だと</b> 、こう中学校から、ずっと英語を第2外国じゃない第1外国語として(はい)勉強しだすけど、 <b>台湾だと、どうなの？</b> 。
169	159	*	JF135	< そういう > < 。
170	160-1	/	TFA011	< あ > > , 第1外国語はやっぱり、。
171	161	*	JF135	英 < 語 > < ?。
172	160-2	*	TFA011	< 英語 > > 。
(中略)				
260	247	*	JF135	<b>日本で人気がある人は、台湾でもく人気があるの</b> > < ?。
261	248	*	TFA011	< そうそう > > 。

(出所：BTSJ1000人日本語自然会話コーパス [出所：281-20-JF135-TFA011])

表4-3：JFB018(日本語母語話者)からの応答要請

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発話内容
147	127	*	JFB018	< そうです > >  ねー、 <b>日本語のほうが難しいよ</b> < ねー > < 。
148	128	*	VFN001	< うーん > > , 難 < しい > < 。
149	129	*	JFB018	< うーん > > 。
150	130	*	VFN001	漢字ーは、とっても < 難しい > < 。
(中略)				
160	140	*	JFB018	<b>ベトナムは、漢字をいんですか?</b> [[「ですか」はほとんど聞こえない]。
161	141	*	VFN001	いえ、ない。

(出所：BTSJ1000人日本語自然会話コーパス [165-12-JFB018-VFN001.xlsx])

JF135とJFB018の発話において、相手の外国人に対して「○○(出身地)ではどうですか」と質問することで、日本人の質問者が日本を比較対象として設定し、外国人の回答者が自国の状況を説明するプロセスが見られる。このプロセスを通じて、自然と「日本人/外国人」というカテゴリー対が

形成される。それは、質問者は日本のシステムや文化を基準に、他国のシステムや文化を比較させるため、外国人の会話相手が自国のカテゴリーに引き寄せられると考えられる。また、「〇〇国ではどうですか」という質問は、特定の形式の応答(「〇では△△です」)を強く求め、それ以外の応答を事実上阻む力を持っている。これにより、外国人の回答者は「外国人」というカテゴリーに固定され、束縛されることになると考えられる。

杉原(2010)は、こうした状況について、「日本人/外国人」カテゴリー対の下での応答が強く要請されると指摘している。相手の外国人が「〇〇(国)事情」の提供を求められ続ける相互行為の中で、「外国人」は自国の事情をコンパクトにまとめて発言するという特定の形で実体化され、固定される。これにより、非対称的な関係性が作り出されるのである。さらに、杉原(2010)は、「外国人」が「外から来た経緯をもって日本で生活している者」という側面が後景化し、「〇〇(国)事情を提供する非日本人」という側面に焦点が当てられると解釈している。このように、相手の外国人が自国の事情を提供する役割に固定されることで、対話の中で明示的に「日本人」と「外国人」の間に境界線が引かれると考えられる。更に、こうした「〇〇(国)ではどうですか」という質問と応答の形式は、言語的共生化の自己保存の過程において、非母語話者と母語話者が自己と非自己を区別する現象と考えられる(杉原, 2010)。

### ③双方が無意識に国の成員カテゴリー化装置を持ち込むこと

表4-4: JFB016とTFI001双方の無意識

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発話内容
611	549	*	JFB016	え(うん), あれ, <u>台湾のお風呂</u> とかって(うん), どんな, どんなんだろうね。
612	550-1	/	JFB016	なんかね..
613	551	*	TFI001	うん <u>日本</u> と<大体…> < 。

(出所: BTSJ1000人日本語自然会話コーパス [158-11-JFB016-TFI001.xlsx])

表4-5: JFB016とTFSu001双方の無意識

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発話内容
152	143	*	JFB016	そっかむしろ <u>台湾の方が</u> 都会…?。
153	144	*	TFSu001	いやいやいや <u>日本の方が</u> 。

(出所: BTSJ1000人日本語自然会話コーパス [(159-11-JFB016-TFSu001.xlsx)])

まず、JFB016とTFI001の会話内容の中で、JFB016は、台湾のお風呂について質問し、台湾の生活様式に関心を示している。この質問により、JFB016は台湾と日本の文化の違いを意識的に取り上げ、「日本のお風呂」と「台湾のお風呂」を比較する枠組みを作り出し、台湾出身のTFI001が自分が所属しているの文化を説明するよう誘導している。応答内容として、TFI001は、日本のお風呂との類似点を述べようとしている。これにより、TFI001は日本を基準にして自国の文化を説明

しようとしているため、その応答も「日本」と「台湾」という国の成員カテゴリーに基づいているように考えられる。次に、JFB016とTFSu001の会話内容の中で、JFB016は、台湾が日本より都会であるかどうかを尋ねている。この質問も、日本と台湾の都市性を比較するものであり、「日本」と「台湾」というカテゴリーを再び対比させ、都市性という観点から両国を比較しているように見られる。それに応じて、TFSu001は、日本の方が都会であると回答し、この応答も、日本と台湾の都市性を比較し、日本を基準にした評価を示している。以上の参加者双方が無意識に国の成員カテゴリー化装置を持ち込むことで自己保存を図っている現象の中で、TFI001とTFSu001は、相手から投げかけの国の比較に関する質問に応じて、日本との比較を通じて自国の文化や都市性を説明する際に、日本を基準にすることで「外国人」としての役割を果たしている。このプロセスで、自身の文化的背景を日本と比較することで確認し、自己保存を図っていることが見受けられる。

#### 4.2.3 成員カテゴリー化装置における自己保存の現象の読み解き

以上で、具体的な会話例を分析することで、出身地という成員カテゴリー化装置におけるマイノリティ側の自己保存の現象を読み取ってみた。この中で、「日本人/外国人」というカテゴリー化における「日本人」と「外国人」の位置関係の違いは、参入側と受け入れ側という視点について検討する際に注目したバーバ(2005)の、植民者と被植民者(もしくはマジョリティとマイノリティ)を表現する際に用いる「中心」と「周縁」という概念に関わると考えられる。ここでの「日本人」というカテゴリー化は「中心に立とうとする」(バーバ, 2005 同上)志向性を帯びている。中心である「日本人」とカテゴリー化された者にとっては、この「自己保存」の形はいわば十全な形で達成されていると言えるだろう。それに対して、周縁である「外国人」とカテゴリー化される者にとっては、そもそもこうした「自己保存」はある種一方的に「非日本人」として括られ外在化される可能性をもった形であり、その意味から十全な「自己保存」とはいえないと考えられる。いいかえれば、「日本人」と同等に一括りでない「外国人」として自己を保つことは成立しておらず、「日本人」を中心として異質性を浮き立たせる「外国人」という形でしか自己を保つことができない状態と言える(杉原2010)。

また、「中心」と「周縁」という位置関係にあって、一方が十全で他方が十全でない「自己保存」のあり方自体が問題であると考えられる。それを十分認識した上で、このような「自己保存」のあり方が接触場面に必然的に現れてしまうと考えられる。ここに現れている「中心」と「周縁」という位置関係は、グローバリゼーションの中で日本社会に就労や留学を目的として移動してきた人々とその家族を対象者としている日本語教育領域をめぐる現実であり、その在り方に向き合うことが重要と考える(杉原2010)。

### 4.3 一方的なフォローから異議申し立てまでのマイノリティの姿

#### 4.3.1 会話データの詳細

杉原(2010)は、大学生を対象とした相互学習型活動における話し合いデータに焦点を当て、進行



中の会話のやり取りの中で形成される参加者間の関係性を微細に記述している。本研究で引用する会話例は、大学生の相互学習型活動におけるグループワークでの会話データであり、「女性の在り方」班の3回目の話し合い(約50分間)を録画したものである。参加者は4名(仮名)で、田中(学部1年)、佐藤(学部3年)、チン(中国の学部4年、来日2ヶ月半の日本語日本文化研修生)、ヘレナ(チェコの大学院2年、来日4ヶ月の大学院の研究生)であり、話し合いの議題はアンケート調査である。このデータを対象とする理由は、非母語話者と母語話者の相互行為上の非対称性が際立って顕在化する場面が長く続いた後、話し合いの後半に参加者間の関係が変化していると解釈される場面が見られたためである。

#### 4.3.2 会話データの分析

杉原(2010)は、この「異なりの対立」する現象に注目し、対立関係が形成される過程を詳細に解明した。以下に、その中の会話例を挙げながら、マイノリティがマジョリティに一方的に従う状態から異議を申し立てるまでの過程を説明する。

##### 会話例①(杉原2010, p151): 話し合いの開始場面

田中: どうでしょうか, [なんか, 清書してきてくれたんですけどー=

佐藤: [どうしましょ

佐藤: =あ, 昨日もー, 話し合いの, まとめた, =

チン: んー

佐藤: =ですけどーんー [(と) 今日聞いていて]

田中: [なんかこれが, すごく] いいじゃないですか=

{教師配布の資料を手に}

佐藤: =えへへへー

ハレナ: はーん, そうそう。

田中: これーの, これー, と,

[比較?], するとすご [い, いいですね?]

佐藤: [比較 ]するー?

ハレナ: \_\_\_\_\_ [んー, \_\_\_\_\_ んー。

話し合いの最初の段階で、田中さんと佐藤さんは議論の進行や意見交換においてリーダーシップを発揮し、具体的な提案や指摘を行っていることが明らかである。例えば、田中さんは「どうでしょうか」や「比較するとすごい、いいですね?」といった発言で会話を主導している。これに対して、留学生のチンさんは「んー」といったあいまいな反応を示し、自己主張を控え、日本人学生の意見に合わせる姿勢が見受けられる。チンさんは具体的な意見や提案を示すことなく、他の人の話

に同調する傾向がある。また、ヘレナさんも「はーん、そうそう。」という軽い同意の発言をしており、議論に対する具体的な意見を持たず、積極的な意見交換を避ける傾向がある。彼女も会話の主導権を日本人学生に委ねている印象がある。このように、会話の中でチンさんとヘレナさんは、日本人学生の意見に従い、議論の主導権を日本人学生に委ねることで、日本人学生のやり方を無意識的に優先していることが伺える。この傾向は、言語や文化の違いによる壁から生じている可能性があり、異文化間コミュニケーションにおける適応行動として理解することができる。

それに関して、杉原(2010, P165)は、母語話者が話し合いをリードして、非母語話者が協力的に合意していく相互行為は、「一見」双方が会話をより育成していくための「協働」のように見えるが、共生化の進化へと向かう現象ではないと考えられると指摘した。

### 会話例②(杉原2010, pp152-153)：チンからの提案提起が反論された

チン：こうか、書いたらーみんなよ [ん

ヘレナ：[読む?]

チン：読む、でしょ?

田中：でも [みんな] いったんは読みますよ。

佐藤：[うん?]

ヘレナ：んー?

田中：みんないったん読ん [でー、あの わたしは] =

佐藤：[うん [あこれ自分じゃない#]]

田中：書かなくていいんだわって思って、次にいくんーだから。

ヘレナ：そうーこれは

チン：んー、もし私だったら、これ、どしてこんな hh に hh。うん、何回も何回も、答えーたことに、  
答えたことに、はーh [hhh, はー

佐藤：[あーそっか。

会話例②の中で、チンは、「イ」を選ばなかった回答者が設問を何度も読む必要がないように、手続きを簡略化することを提案している。具体的には、選択肢「イ」を選んだ回答者と「イ」を選ばなかった回答者で異なる処理を行うことで、無駄な手間を省こうと考えている。チンはまた、自身が同じ状況に置かれた場合に感じる煩わしさを説明し、何度も同じ質問を読むことの不便さを補足している。一方で、田中はすべての回答者が一度は設問を読むべきだと主張している。田中の意見では、全員が設問を確認することで次の質問に進めると考える。そのため、チンの提案に対して反論し、全員が質問を読むという方法を維持するべきだと述べている。

### 会話例③(杉原2020, p154)：チンの異議申し立て場面(会話例2から連続)



議申し立てに成功するまでの段階を描いた。

本研究が示す重要な点は、この過程において、マイノリティが勇気を持って自己を主張し、積極的に自己表現することにより、マジョリティとの関係性が深まり、多文化共生が促進されるという点である。特に、自己主張によってマジョリティとの距離を縮め、対等な対話を通じて多文化共生が実現する可能性が示唆された。

しかしながら、マイノリティが異議申し立てに成功し、自己利益を実現することが、必ずしも真の多文化共生に繋がるわけではないという懸念も浮かび上がる。マイノリティの利益が満たされた場合、新たにマジョリティが不利益を被り、逆にマイノリティの立場に置かれるという終わりのない循環が生じる可能性がある。このため、マイノリティの視点から考える真の多文化共生の実現には、単に自己実現や抗議の成功に留まることなく、根本的な問題を解決するためには、より包括的なアプローチや議論が必要であると考えられる。今後の研究では、このような視点からさらなる探求が必要であると結論付ける。

## 5. 多文化共生の前提：多様性

アメリカの生物学者リン・マーギュリス (Lynn Margulis) の研究が示すように、共生は自然進化のメカニズムであり、これにより世界は多様性を維持できる。そして、多様な個体間の複雑な相互作用によって新しい種が生まれ、世界は絶えず進化し続ける。共生は生物多様性を維持し、多様な個体間の相互作用を通じて新しい種を生み出し、持続的な自然進化を実現するメカニズムである (陳, 朱, 劉, 2021)。自然界の発展規則に基づけば、生物間の共生によってのみ世界の多様性が維持される。逆に言えば、共生を維持するためには多様性を保つ必要があると言えるだろう。これを人間社会の共生に適用すると、宝月 (2017) は「共生社会」の場合、異質な他者や差異を前提にしており、異質な立場の者の中で粘り強い論議をすることが「共生社会」の一つの要件であると指摘している。人間社会においても、多様性の重要性が強調されている。

古典的な「共生」の概念にも多様性が強調されている。例えば、中国の儒教思想の代表者である孔子は『論語・述而』の中で次のように述べている：「君子は和して同せず、小人は同じて和せず」（君子は他者と調和しつつも、同調せず。小人は同調しながらも、和を築けない）。この「和して同せず」という思想は、儒教の核心的かつ重要な概念である。孔子はここで「和」と「同」を対比させている。「和」とは異なる要素の調和と共存を指し、「同」とは単一の状態であり、異なる要素の存在を許容しないことを示している。古代中国の春秋時代を扱った歴史書である『国語・鄭語』にも「和は実に生物を生じ、同では続かず」とあり、古典的な「共生」の概念が述べられている。異なる生物が混在することで自然は繁栄するが、同じ種類の生物のみが存在すると生態系の繁栄は持続しないという意味である。これは中国古代の「同姓不蕃」（日本語：同姓不婚）の考え方の延長であり、生態学的な法則でもある (曾 2021)。

日本の学者である尾関周二 (1995) は、「共生」が異質性を前提として「相互生存」の関係を築くも

のであると考えている。彼は共通と共生の違いを強調し、共通は当事者が特定の価値観、規範、目標を共有することを指し、一方、共生は異なる価値観、規範、目標を持つ当事者同士が「相互生存」の関係を築けると述べている。また、日本の学者である石原享一(2015)も、多文化の共生には「異質な要素の導入」と「血統原則の軽視」という2つの要点があると述べている。共生文化には2つの条件が含まれており、1つ目は共生の概念である。これは行動主体が実践において他者と一体化し、分離できない共同体内に内在するということである。2つ目は行動主体の多様性である。共生はすべての行動主体を均一化することではなく、個性を保持しながら相互に有益な要素を吸収することを意味するという。

そのように共生の基盤が多源性である場合、多様性は多文化共生の前提であり、その両者が共存することで、多文化共生のグローバルガバナンスの観点が形成されるだろう。

## 6. 今後の課題

真の多文化共生を実現するためには、マイノリティの視点から「多様性」に基づく新たなアプローチを模索することが不可欠である。現状では、マイノリティが自身の権利や利益を主張することが重要である一方で、それだけにとどまらず、より広範な「多様性」の視点を社会全体に浸透させることが求められている。要するに、個々の権利主張を超えて、多様性そのものを社会の共通基盤として再定義し、新たな共生モデルを構築する必要がある。このような視点の転換は、単なる自己利益の追求に留まらず、他者との協働や相互理解を通じた持続可能な共生関係の確立に繋がると考えられる。したがって、今後の課題としては、こうした多様性の視点をいかに実践的に適用し、多文化共生を具体的に進展させるかを検討する必要がある。今後の研究では、この視点を中心に、実効性のあるアプローチを追求していきたいと考える。

## 【参考文献】

### 〔日本語〕

井上達夫(1986)「共生の作法：会話としての正義」創文社

井上達夫(2021)『共生の作法：会話としての正義』増補新装版、勁草書房

植田晃次(2006)「『ことばの魔術』の落とし穴」「『共生』の内実：批判的社会言語学からの問いかけ」植田晃次、山下仁編著、三元社

宇佐美まゆみ(2019)『基本的な文字化の原則(Basic Transcription System for Japanese: BTSJ) 2019年改訂版』pp16-18

宇佐美まゆみ監修(2023)『BTSJ1000人日本語自然会話コーパス』, 科研基盤研究(A)「語用論的分析のための日本語1000人自然会話コーパスの構築とその多角的研究」(研究代表者：宇佐美まゆみ)及び、国立国語研究所、機関拠点型基幹研究プロジェクト「日本語学習者のコミュニケーションの多角的解明」(2016～2021)

岡崎敏雄(2003)「共生言語の形成—接触場面固有の言語形成—」宮崎里司、ヘレン・マリオット 編、接触場面と日本語教育：ネウストブニーのインパクト、明治書院 pp23-44

多文化共生社会における周縁化されたマイノリティの在り方

岡崎敏雄 (2009) 『言語生態学と言語教育：人間の存在を支えるものとしての言語』, 凡人社

尾関周二 (1995) 『現代コミュニケーションと共生・共同』, 青木書店

尾関周二 (2016) 「〈共生社会〉理念の現代的意義と人類学的展望」『共生社会 (1) —共生社会とは何か』尾関周二・矢口  
芳生・亀山純生・木村光伸編, 農林統計出版

金子晴勇 (2023) 『対話と共生思想』知泉書館

倉八順子 (2001) 『多文化共生にひらく対話：その心理学的プロセス』明石書店

杉原由美 (2010) 『日本語学習のエスノメソドロジー：言語的共生化の過程分析』勁草書房

中山智晴 (2012) 『競争から共生の社会へ：自然のメカニズムから学ぶ』北樹出版

ホミ・K. パーバ (2005) 『文化の場所：ポストコロナリズムの位相』, 法政大学出版局

宝月誠 監修ほか (2017) 『共生社会論の展開』晃洋書房

水谷雅彦 (2022) 『共に在ること：会話と社交の倫理学』, 岩波書店

### [中国語]

陈春花, 朱丽, 刘超等著. 协同共生论：组织进化与实践创新. 机械工业出版社有限公司. 2021:31.

石原享一：《世界凭什么和平共生》，梁憬君译，世界知识出版社，2015.

曾繁仁著. 曾繁仁文集(第二卷)：西方美学范畴研究. 中国社会科学出版社. 2021:163.

### [英語]

Harvey Sacks, (1972) , “An initial investigation of the usability of conversational data for doing sociology”, In  
Studies in Social Interaction (David Sudnow, ed.) , New York, Free Press, pp. 31-74.

(G. サーサス [ほか] 著, 北澤裕, 西阪仰 訳 (1989) 「会話データの利用法：会話分析事始め」)

# The Role of Marginalized Minorities in a Multicultural Society:

A Study Based on Conversation Analysis in Interactions with the Majority

Xiaohua WEI

(Doctoral Program, Graduate School of Education, Tohoku University)

This study conducts a conversation analysis of the interactions between minorities and the majority in a multicultural society, focusing on various contact situations. Specifically, it examines the process through which minorities, who initially engage in self-preservation under the categorization mechanism of the nation-state, gradually extend beyond this framework to engage with the majority. This process begins with minorities displaying a one-sided submissive stance toward the Japanese majority, and over time, progresses to self-expression through proposals and negotiations, eventually leading to successful dissent. However, when the interests of minorities are met, a cyclical phenomenon may arise where the majority, now disadvantaged, is placed in the minority position. The study concludes that the realization of true multicultural coexistence requires further exploration beyond the mere self-realization or success of protests by minorities, emphasizing the need to approach the issue from the perspective of “diversity,” which is fundamental to multicultural coexistence.

Keywords : Multicultural society, minority, contact situations, conversation analysis, diversity

